

P-1

「日本手話と日本語における自他の対応－対照言語学的研究に向けて－」

安東 明珠花・庵 功雄・岡 典栄

要旨

本発表では、ろう児が日本手話でどのように自他の対応を理解しているか、また、それをどのように説明できるかを分析し、日本手話と日本語との対照言語学的研究への展開について考察する。ろう児の書記日本語の動詞の誤用の要因として、日本手話において自他の区別がつきにくいことが挙げられた（安東・岡，2019）。ろう児が作成した日本手話のスキットやその解説を分析した結果、ろう児は日本手話では自他の区別をメタ言語的にも理解していることがわかった。また、日本手話における自他の区別として、文末の指さし、語形の違い、RS（レファレンシャルシフト）¹などがあることが認められた。今後は日本手話と日本語の対照言語学的研究に向けて、自他の対応のより多くのデータを集め、分析を進めることが課題である。その後、ろう児への効果的な日本語指導法について検討していきたい。

1. はじめに

ろう児とは聴覚に障害があるために音声言語（日本語）を聴覚から習得することが困難な児童を意味する。多くのろう児（ろう者）にとっての第一言語は日本手話であり、日本語は学習しなければ習得できない第二言語である。本研究では、ろう児以外の日本語学習者においても、間違いの多い、自動詞と他動詞の区別を、日本手話と日本語において対照言語学的に分析、考察し、ろう児の日本語教育の効果的な指導法を検討することを目的とする。安東・岡(2019)では日本手話の自他の対応は主として手の動き（手話の語形）以外の要素から構成され、これが児童の日本語の誤用の要因の一つであると考察した。本発表では、ろう児が日本手話でどのように自他の対応を理解しているか、また、それをどのように説明できるかを解析し、日本手話と日本語との対照言語学的研究への展開について考察する。

2. 先行研究

日本手話の自他の対応に注目した先行研究は数少ない。今里（2014）では、文末の指さしで自他の区別をつけている例が提示されている。自動詞である「私の自転車が（勝手に）パンクした」の時は、文末指さしが pt3（自転車）に、他動詞である「私が自転車をパンクさせた」場合は、文末指さしが pt1（自分）になっている。この論文では、文末指さしが自動詞では pt3 に、他動詞では一人称が主語である場合には pt1 になる例が挙げられている。しかし、自動詞の主語が有情物である場合（「私が寝る、歩く」のような）自動文の文末に pt1 が現れること、また、他動詞文の主語が三人称で、「彼が本を読む」のような文末指差しが pt3 になるような文は扱われていない。

安東・岡（2019）では、ろう児の日本語習得における手話からの干渉を分析し、日本手話において自

¹ 話者が「現在の自分」以外の自分の考えや行動を引用して伝える表現をレファレンシャルシフト、またはロールシフトという（松岡, 2015, p.107）。

他の区別がつきにくい動詞は、日本語に変換する際に誤用が出やすいということが考察されている。先行研究（安東・岡, 2019）では、小学校低学年の教科書で使用される動詞（30 語）を日本手話で表出したものを正しく日本語で記述できるかを分析し、手話からの干渉が強い日本語動詞を検討した。正答率が低かった（50%以下）動詞は「開ける」、「あげる」、「入れる」、「変える」、「消す」、「出す」、「捕まえる」、「付ける」、「並べる」、「弾く」、「呼ぶ」、「喜ぶ」、「割る」であった。そのうち、下線を引いた4つの動詞は「手話から日本語に変換するときに自他動詞の区別がつきにくい」という特徴を持っている。例えば、「開ける」は他動詞だが、手話動詞では〈開く〉も〈開ける〉も手の動き（手話の語形）は同じものである。手話では、体の向きや指さしなどの、手形以外の要素によって自動詞と他動詞の区別をつける例もある。そのため、手の動きだけでは自動詞と他動詞の区別が付きづらく、日本語に変換する際に間違いやすくなってしまうのだ。この先行研究では、ろう児の手話から日本語への変換、つまり、ろう児の手話と日本語の二言語の能力や二言語間の干渉などを分析・考察した。本研究では、ろう児の第一言語である手話におけるメタ言語能力や自他の対応の手話表出について分析・考察し、日本語と日本手話の自他の対応の対照言語学的考察に繋げることを目的とした。

3. 研究手法

ろう児に助詞の誤用が多いことは知られている。庵・岡（2015）では、「が」と「を」の誤用が、主格と目的格という格関係自体の理解ができていないために生じるのではないことが示されたため、表層においていかなる日本語の助詞を使うかという、日本語教育の指導法の有効性が期待された。

次の段階として、「を」をとる二項動詞（他動詞）と「が」のみで成立する一項動詞（自動詞）を導入した。

2018 年 11 月から 2019 年 1 月にかけて、都内の私立ろう学校小学部 3, 4 年生に対し、日本語科と手話科で自動詞と他動詞の違いを学習した。児童たちは、日本語では「ドアを閉める」か「ドアが閉まる」かでは異なる動詞が用いられることを学習し、日本語には「閉める」と「閉まる」というような動詞の自他のペアが存在することを学んだ。

次に手話科において、児童たち自身が手話で自他の区別を説明し、それから例文の入ったスキットを作成し、実際に演じてみるという授業を行った。まずは、ろう教師が手話で提示した例などを参考に、児童たちは自動詞と他動詞の違いについて意見を出し合い、それぞれの定義を作った。その結果、児童たちは自動詞が自然に起きること、他動詞が動作主となる人を必要とすること（基本的に動作主は一人称（自分）しか想定されていない）という定義が、クラスの中でまとまった。この段階で、児童は「自動詞」を表す手話単語として、〈自分〉の〈自〉ではなく〈自然〉の〈自〉を表す〈自〉を意識的に選択しており、自動詞が自分の関与なしに、自然に起きることであるという明確な認識を持っている。

この課程の中で、その後、児童は自分たちで自他の対応のある動詞を選び、それを使って日本語で例文を作成した（例えば、「本を落とす」「本が落ちる」など）。次に、日本語で作成した例文を使い、グループごとに、〈開く・開ける〉〈起きる・起こす〉〈落ちる・落とす〉〈消える・消す〉〈戻る・戻す〉〈汚れる・汚す〉を用いたスキットを作成した（トイレの電気が自動で消える場合と、自分が実際にスイッ

チを押して消す場合など)。スキットを演じる前には児童が自動詞と他動詞の定義を手話で説明した。また、スキットを演じた後は、スキットの流れを改めて手話で説明した。定義の説明、スキット、スキットの解説をすべて録画し、分析した。

4. データ一覧

スキットで使われた自他の対応の動詞のセットは〈開く・開ける〉〈起きる・起こす〉〈落ちる・落とす〉〈消える・消す〉〈戻る・戻す〉〈汚れる・汚す〉の6つである。彼らがどのように自他の対応を理解しているかを、児童たちの自他の対応についての説明・スキット・スキットの解説の動画を見て分析した。表1に自他の対応を使った例文の一覧を提示する。

表1 スキットで使用された自動詞他動詞と例文の一覧

	自動詞	例文	他動詞	例文
1	開く	窓が開く	開ける	窓を開ける
2	起きる	男の子が起きる お客さんが起きる	起こす	男の子を起こす お客さんを起こす
3	落ちる	本が落ちる 帽子が落ちる	落とす	本を落とす 帽子を落とす
4	消える	電気が消える	消す	電気を消す
5	戻る	本が戻る 帽子が戻る	戻す	本を戻す 帽子を戻す
6	汚れる	本が汚れる 服が汚れる	汚す	本を汚す 服を汚す

次に、表1の自動詞の例文を児童がどのように手話で解説したかを表2に一覧で提示する。また、表3で、他動詞の例文の解説とラベルを一覧で提示する。

表2 自動詞の例文とスキット表現・手話ラベルの一覧

	自動詞例文	スキットの表現をまとめたもの 解説の手話ラベル
1	窓が開く	部屋が寒いな～と思ったら、窓が開いていた。 /窓/ /開く/ pt3
2	男の子が起きる	授業中机で眠りに落ちたが、首がかくっとして起きた。 /授業/ /時/ /机/ /眠る/ /起きる/ pt1
	お客さんが起きる	電車に乗っていて眠ってしまったが、終点で起きた。

		/電車/ /乗る/ /寝る/ /終点/ /自分/ /起きる/ pt1
3	マジックが落ちる	マジックが落ちた。 /マジック/ /落ちる/ pt3
	本が落ちる	本が落ちた。 /本/ /落ちる/ pt3
4	電気が消える	お化け屋敷で懐中電灯が突然消えた。 /お化け屋敷/ /時/ /懐中電灯/ /突然/ /消える/ 寝ている時、突然部屋の電気が消えた。 /寝る/ /時/ /誰/ /突然/ /消える/
5	本が戻る	私がトイレから戻ってきたら、机の上に置いてあったはずの本が本棚に戻っていた。 /私/ /トイレ/ /終わる/ /戻る/ /前/ /本/ /置く/ /わかる/ /ない/ /本棚/ /本/ pt3 /戻る/ pt3
6	本が汚れる	友達から借りたマンガ本を読んでいたら、汚れていた。 /私/ /友達/ /マンガ本/ /借りる/ /読む/ pt3 /汚れる/
	服が汚れる	お母さんが洗濯物を干そうとしている時、服が汚れていた。 /お母さん/ pt3 /朝/ /洗濯/ /時/ /服/ /取る/ pt3 /汚れる/

表3 他動詞の例文とスキット表現・手話ラベルの一覧

	他動詞例文	スキットの表現をまとめたもの 解説の手話ラベル
1	窓を開ける	部屋が暑いので、窓を開けよう。 /窓/ /開ける/ /良い/ /開ける/
2	男の子を起こす	男の子が授業中に寝ていて、(先生が) 起こした。 /授業/ /時/ /眠る/ /ダメ/ /起こす/ パ (完了)
	お客さんを起こす	終着駅に着いたにも関わらずお客さんがまだ寝ているので、駅員が起こす。 /電車/ /乗る/ /駅/ /眠る/ /止まる/ /警察 (駅員) / /起こす/
3	帽子を落とす	天気が良いので空を見上げていたら、帽子が落としてしまった。 /天気/ /良い/ /見上げる/ /時/ /帽子/ /落とす/
	メガネを落とす	先生が黒板に書いた問題を出した時、答えがわかったので、生徒が手を上げた時にメガネに当たってメガネを落とした。

		/ (黒板の問題を) さす/ /出す/ /時/ /わかる/ /手をあげる/ /メガネ/ /当てる/ /落ちる/ /落とす (落ちる?) /
	本を落とす	私がカバンを置いた時に本を落としてしまった。 /私/ /カバン/ /本/ /置く/ /落ちる/ パ (しまった)
4	電気を消す	トイレを出た時、自分で電気を消した。 /トイレ/ /時/ /自分/ /消す/ /消える/ パ (完了) 寝る時自分で電気を消しました。 /寝る/ /時/ /私/ /消す/ パ (完了)
5	本を戻す	本を読んでいたら、誰かがその本面白くないと言っていったので、本を本棚に戻した。 /本/ pt3 /読む/ /誰/ pt3 /面白くない/ pt3 /行く/ /面白くない/ /本を閉じる/ /本棚に置く/ /戻す/ pt1
6	本を汚す	私が友達と話しながら本を読んでいる時、飲み物をこぼして本を汚してしまった。 /私/ /読む/ /友達/ /話す/ /飲む/ /こぼす/ pt3 パ (しまった) /汚す/
	服を汚す	昨夜お店で友達と話しながら食べていて、ぼーっと話を聞いていたから、こぼして服を汚してしまった。 /私/ /昨日/ /夜/ /時/ /お店/ pt3 /行く/ /友達/ /話す/ /食べる/ /ボー/ /食べる/ /こぼす/ pt1 /汚す/ /見る/ /いない/ /良い/ pt1

5. データ分析

児童たちは手話文では正しい例文を産出しており、自他の区別が日本手話においては理解できていることが分かった。つまり、自動詞は「自分以外の第三者によって起きること」、他動詞は「動作主が自分であること」という定義のもと、スキットを作成することができていたと言える。庵・岡 (2015) は、児童が格関係を理解していることについて言及されているが、自動詞と他動詞の違いについても理解し、メタ言語的に説明できることは新たな発見であった。

自動詞を表す手話文では、今里 (2014) で示されたように、文末に pt3 の指さしがあるものがほとんどである。しかし、「消える」の自動詞文では文末指さしは現れていない。これは、「消える」「消す」では手話の語形が異なるため、文末指さしで自他を区別する必要がないからだと考えられる。また、「起きる」「起こす」も手話の語形が自他で異なる。しかし、「起きる」では、文末指さしが pt1 になっている。これは、他の 5 つの自動詞文と異なり、主語が「男の子」や「お客さん」などの有情物であり、話者が男の子やお客さんになったつもりで手話表現を行なっているからだと推測できる。

一方、他動詞文は自動詞文と比べて統一性がないように見える。文末に pt1 が出てきたのは「本を戻

す」と「服を汚す」の2文だけであった。文末に/パ(しまった)/の手話表現を表す例がいくつかあるが(～を落とす、～を汚す)、これは「～してしまった」という意味の手話表現である。これらは、明らかに「～してしまった(しまった!)」主体が自分自身(一人称の主語)であるために起きる表現で、他動詞文には動作主が必要であるという認識があることがわかる。「消す」と「起こす」においては、前述したように手話の語形が自他で異なるため、文末指さしが必要なかったと考えることができる。

5.1. 日本手話における自他の区別の方法

今回抽出した児童が表出した手話の分析を通して日本手話における自他の対応の区別の方法として、指さしや語形の違いがあることがわかった。また、文末の/パ(しまった)/によって動作主が自分自身であることを表す例もあった。指さしで区別する自他の対応は、自動詞・他動詞ともに語形が同じであるため、文末の指さし等で動作主が誰かを表す必要があるからである。自動詞は自分以外の誰かが動作主であるため、pt3の指さし、他動詞は自分が動作主であるためpt1の指さしが使われていた。もし、この説明が典型的に成り立てば、日本語科の指導の中で「文末指さしがpt3のものは自動詞、pt1のものは他動詞」と説明することができる。しかし、他動詞の動作主は自分以外の第三者の場合もある(「駅員さんがお客さんを起こす」など)。その時はRS(レファレンシャル・シフト)が用いられている例があった。自分が駅員になったつもりで、お客さんを起こす様子を表す例だ。このような例もあるので、他動詞の主語としては、一人称だけでなく、二人称、三人称もあることを早めの段階で説明する必要があるだろう。

また、語形が違う自他の対応として、今回のデータの中では〈消える〉と〈消す〉、〈起きる〉と〈起こす〉があった。これらは手話動詞の語形がそもそも違うので、指さしなどで区別する必要がない。このように自他で語形が違う例では、それぞれの別々の語として認識されている可能性が高く、手話として、自他の対応(ペア)があると理解することが困難であると予測される。しかし、児童はそれぞれの手話動詞に日本語のラベルを当てはめて暗記することもできるので、指さしによる区別の場合と比べて学習しやすいかもしれない。

他にも自動詞においては、主語が生物か無生物であるか(もしくは、人か人以外か)でも指さしのpt1(男の子が起きる)とpt3(窓が開く)が異なる可能性があることも示唆された。これについては今後より多くのデータを集めると共に、児童が自動詞の指さしはpt3のみであると誤解しない指導をする必要がある。

6. 日本語との対照言語学的研究への展開

日本手話では指さしやRS、語形の違いなどで自他の区別を表していることがわかった。今後の課題としては、まずデータの数を増やすことが求められる。自他の対応の種類の傾向が見られたので、①自他で語形が同じ手話動詞、②自他で語形が異なる手話動詞をそれぞれ集め、自他の区別が今回のデータの類型に当てはまるのか、異なるのかを検証する必要がある。優先的に集めるべきデータは②自他で語形が異なる手話動詞である。手話動詞ごとに日本語のラベルをつけることができるため、導入がしやす

いと予測できるからだ。また、他動詞において動作主が自分以外の例文を集め、どのように表出しているのか分析することも今後の課題である。

日本手話では自他の区別を説明できたが、日本語の文中の空所に自動詞か他動詞を入れるタイプのタスクでは、3週続けて行ったテストで回を重ねても正答率は上がらず、むしろ1週目の方がよい児童がいて、学習の効果は検証できなかった。この結果からわかった問題は、児童が日本手話では自動詞と他動詞の違いを理解し、説明できるのにも関わらず、日本語で正しく書くことができない点である。この要因について日本手話と日本語の自他の対応を対照言語学的に分析する手法を考察することが、現在の課題である。

日本手話における動詞のカテゴリーが日本語と同様であるかはいまだ明確ではないが（日本手話の動詞は、形態論的に無変化動詞、一致動詞、空間動詞に分けられる）、動詞の中での自他の区別は両言語間で際立って異なるようには見えない。両言語における自他の概念的な違いが日本語におけるアウトプットの誤用を引き起こしているのではないのであれば、今後どのような指導法を行っていけばよいのか。対照言語学的分析をした後、ろう児に対する日本語の自他の対応の指導法を再検討していきたい。

【引用文献】

安東明珠花・岡典栄（2019）「ろう児と〈やさしい日本語〉」庵功雄・岩田一成・佐藤琢三・柳田直美（編）

『〈やさしい日本語〉と多文化共生』257-274、東京：ココ出版。

庵功雄・岡典栄（2015）「ろう児に対する書記日本語教育のための予備的考察―「9歳の壁」を越えるために―」『日本語教育学会2015年度秋季大会予稿集』。

今里典子（2014）「日本手話における主語/目的語標示の助動詞について」『言語研究（Gengo Kenkyu）』146巻、31-50。

岡典栄・赤堀仁美（2013）『文法が基礎からわかる 日本手話のしくみ』東京：大修館書店。

松岡和美（2015）『日本手話で学ぶ 手話言語学の基礎』東京：くろしお出版。